巻　頭　言

食卓のシラスから地球の変化を知る

静岡県におけるシラスの水揚量は全国でも上位であり、食卓に並ぶ機会も多く、県を代表する水産物の一つです。静岡県内でのシラス漁は3月下旬に解禁し、翌年1月中旬まで行われます。水揚量の多い地域は、駿河湾西部から遠州灘沿岸にかけてですが、最近では伊東地域等の伊豆半島でもシラス漁が行われるようになりました。そんなシラスに、今、ある変化が起きていることを皆さんはご存知でしょうか？

本県で「シラス」として流通するものは、主にイワシ類の子供です。さらにイワシにも種類がありますが、漁期を通してカタクチイワシのシラス（以下、カタクチシラス）を主体に、3～5月頃の春漁ではマイワシのシラス（以下、マシラス）も漁獲されます。そして近年は、春漁におけるマシラスの水揚割合が増加傾向にあります。この春漁におけるシラスの魚種組成の変化は、その親である太平洋に分布するイワシ類の資源量の変化が大きく影響しています。1970年代からマイワシの資源量は急激に増加し、1987年には2,000万トン近い最盛期となりました。その後は減少傾向となり、2000年代は10万トン前後の低水準でしたが、2010年代に入ると再び増加傾向となり、現在の資源量は200万トン程度とされています。逆に、カタクチイワシの資源量は1980年代までは15万～30万トン程度の低水準でしたが、1990年代に入ると増加傾向となり、2003年には150万トン近い最盛期となりました。しかし、その後は再び減少傾向となり、現在の資源量は20万トン以下とされています。

このイワシ類の資源量の変化は、レジーム・シフトと呼ばれる地球規模での気候変動によるものだと考えられています。この資源量の変化を受けて、本県で春漁に漁獲されるシラスも、マイワシの資源量が多く、カタクチイワシの資源量の少なかった1980年代はほとんどをマシラスが占めていましたが、マイワシの資源量が減少傾向、カタクチイワシの資源量が増加傾向になると、カタクシラスの水揚割合が徐々に増加し、マイワシの資源量が少なく、カタクチイワシの資源量が多かった2000年代には、ほとんどがカタクチシラスに変わりました。そして、マイワシの資源量が増加傾向、カタクチイワシの資源量が減少傾向にある現在は、1980年代に見られた春漁におけるシラスの魚種組成の変化と同様のことが起こっているのです。

マシラスとカタクチシラスは、外見的特徴から見分けることができます。マシラスの頭部はやや角張っているのに対して、カタクシラスは丸みを帯びています。次にシラスを食べる機会があれば、その魚種組成に注目してみてください。地球規模で起きているダイナミックな変化を感じ取れるかもしれません。

（永倉靖大）